

勿凝学問 285

会話について行けなかった「チャレンジ雇用」？
アメニティ・フォーラム出席への準備段階にて

2010年2月2日
慶應義塾大学商学部
教授 権丈善一

昨年、総選挙が終わって日も浅かった9月15日に大熊由紀子さんからメールが届く。
(アメニティ・フォーラムの趣旨をとてもうまく表現された文章なので
紹介させていただきます…)

大津プリンスホテルで、毎年開かれ、今回は14回めになる「アメニティー・ネットワーク・フォーラム」のこと、ごぞんじですか？

日本の社会保障を考える上で、欠くことのできない集まりです。
そこでの鼎談にぜひ、ご登壇いただきたいというお願いの縁結び役を依頼されてメールしています。

このフォーラムは、障害のある人たちが山奥の「施設」に「収容」されるのではなく住み慣れたまちで暮らすために必要なものは何か多面的に話し合う集いです。
といっても、まったく堅苦しくなく、実に楽しいのが特徴です。

14年前は250人で始まったのですが、最近は1500人があたりまえになりました。
登壇する人々は、無名の現場の若者、障害のある当事者から、行政関係者・学者・作家・映画監督・音楽家など実にさまざま。
深夜の2時まで語り合うという、とてもユニークなフォーラムです。

今回は、2010年2月5日（金）～7日（日）の3日間。

その中で、司会役私の「福祉社会の未来を描く」というシンポジウムに、権丈先生のご登壇をという企画を実行委員会が考えられ、「口説く役目」も、私がお引き受けするハメとなりました。

云々云々…

その時に、同封されていたフォーラムの紹介ファイルは、[これ](#)。人が大勢いてびっくり仰天！

僕からの返事は、

こんばんは。つい先日、隠居生活に入りましたので、その頃（も）、スケジュールはスカスカです。煮るなり焼くなりお任せいたします<(_ _)>ペコッ

最近になって説明を受けたのだけど、僕をフォーラムの壇上に引っ張り出そう(?)と企画されたのは、フォーラムの主催者のひとりである毎日新聞記者の野沢和弘さんらしい。僕が書いているのをいろいろと読んで下さっているようで、その上でのご指名らしい。障害者福祉については一度も書いたことはない。そうであるのに、僕が書いてきた文章から、障害者施策に必要な何かを読み取って下さったり、あるいは僕に障害者問題をインプットしたら何が生まれるかを期待してご指名があるということは、「職業は考えること」と自己規定している僕にとっては非常に嬉しいことである。野沢さん達が書いてきた文章を読んだりしているうちに、それこそ最近になって、野沢さん達のおおよそのねらいはなんとなくわかるようになった気がする。フォーラムの初日に、野沢さんとの夕食がセットされているようで、楽しみにしている。

ということで、数ヶ月前に、僕は、施設見学などをしてみたいと申し出て、最近、フォーラムの主催者たちに引率されて、障害者施設の見学などに出かけていた。そこでフォーラムの主催者や施設の人たちは、新参者の僕には分からない専門用語を使って話をされているわけだけど、その中に、「チャレンジ雇用」なる言葉が登場する。さすがの僕も、「チャレンジ」なる語も、「雇用」なる語も知っているんだけど、「チャレンジ雇用」なる言葉が登場する会話についていくことができない・・・なっ、なぜだろか!?

話をよく聞いていると、僕の頭の中で、「チャレンジ雇用」を「チャレンジ就業」に置き換えれば理解できることが分かった。各省庁・各自治体において、障害者がはじめて働く経験を積むことを、「チャレンジ雇用」と言うらしいんだけど、僕ははじめ、「チャレンジ雇用」を、「何、霞ヶ関がチャレンジして雇用するって、誰を雇用するんだ?」と受け止めてしまっていたのである。

チャレンジ雇用、[お役所的解釈](#)

このアメニティ・フォーラム、いよいよ今週の2月5日から7日にかけて開催される。

[第14回 アメニティ・ネットワーク・フォーラム プログラム](#)

内輪ネタのおまけ

オダジマン、議事堂に続いて、大津プリンスにも出沒。

まあ、僕が鞆持ちしなければならなくなるのがオチだろうけどね(笑)。